

平成 28 年 8 月 31 日放送



思い当たったら要注意！
～抗リン脂質抗体症候群のお話～

土浦協同病院
臨床検査部 宮本千聖

司会者：抗リン脂質抗体症候群とはどのような病気ですか。

宮本：この病気の特徴は、血液が血管の中で固まり「血栓」ができやすくなるということです。血栓ができることによって血流が悪くなり、脳梗塞や心筋梗塞、また妊娠中の女性ですと、胎盤の働きが悪くなり流産を引き起こす原因にもなります。動脈硬化などのない若い人に血栓症が見られたり、妊娠しても流産を繰り返したりする場合この病気にかかっている可能性が高いです。

司会者：抗リン脂質抗体症候群では、なぜ血栓ができるのですか。

宮本：ふつう、私たちの体の中に細菌やウイルスなどの異物が侵入してくると、これらの異物を攻撃・排除するための抗体が体内でつくられます。これが免疫機能です。しかし、免疫機能が異常をきたすと、自分の正常な細胞や組織まで攻撃してしまう「自己抗体」ができてしまうことがあります。抗リン脂質抗体症候群患者の体内にある「抗リン脂質抗体」もそのひとつです。この自己抗体が血液中に存在すると、体の細胞を構成しているリン脂質や、リン脂質とタンパク質の複合体に反応し、血栓症を引き起こしてしまうのです。

司会者：どのような症状がみられますか。

宮本：抗リン脂質抗体症候群の主な症状は、「動静脈血栓症」、「妊娠合併症」の2つです。血栓症は動脈にも静脈にも発症するのが特徴です。動脈なら脳の動脈に血栓が起こる「脳梗塞」、静脈なら「深部静脈血栓症」や「肺塞栓症」があります。また、動脈血栓・静脈血栓いずれも繰り返しできることも特徴です。妊娠合併症には、習慣性流産、子宮内胎児死亡や妊娠高血圧症候群などがあります。流産は妊娠初期に起きることが圧倒的に多いのですが、抗リン脂質抗体症候群が原因の流産は「安定期」といわれる妊娠中期・後期に起こります。これは、胎盤の働きが悪くなり、赤ちゃんに十分な栄養が行き届かなくなるためだと考えられています。流産しやすい、というと「赤ちゃんができにくい」というイメージがありますが、この病気は妊娠が成立しないわけではないのです。

司会者：抗リン脂質抗体症候群の検査方法にはどのようなものがあるのでしょうか。

宮 本：大きく分けて2種類の検査があります。1つめは、血液凝固検査です。この検査は、血液を固めたり、溶かしたりする働きが体の中できちんと行なわれているかを評価する検査です。抗リン脂質抗体症候群では、先程もお話したとおり血栓ができやすくなります。しかし、その患者さんの血液の凝固にかかる時間を測定すると、指標となるプロトロンビン時間（PT）「活性化部分トロンボプラスチン時間（APTT）」が延長します。血栓ができやすくなる、ということは体の中では血が固まりやすい状態なので、凝固にかかる時間を測ると短縮すると考えてしまいますが矛盾した結果が出るのです。PTやAPTTなどの凝固検査を行なうにはリン脂質を使用した凝固反応が必要ですが、この反応を抗リン脂質抗体が阻害してしまうためにこのような結果になるのだと考えられています。2つめは、抗体検査です。抗リン脂質抗体とよばれる物質が体の中に存在しているか調べます。代表的な物質に、抗カルジオリピン抗体・抗 β_2 グリコプロテインI抗体・ループスアンチコアグラントの3つがあります。この3つのうち、一項目が12週間以上の間隔で2回以上陽性になった時点で、抗リン脂質抗体症候群と診断されます。以上のような検査結果と臨床症状から総合的に判断していきます。

司会者：凝固検査のお話がありましたが、PT・APTTとはどのような検査ですか。

宮 本：みなさん、転んで擦り傷ができ出血しても、少し時間が経つといつの間にか血がとまっていますよね。出血してもきちんと止血するこの一連の流れには、血管の中に存在する血小板や凝固因子といった物質が関わっています。凝固因子には、様々な種類が存在し、いくつかの経路で凝固反応を進めていきます。PT・APTTはそれぞれ別経路の凝固時間を示しているので、どの経路で異常が起きているのか判別することができます。抗リン脂質抗体症候群では、APTTの延長が特徴です。その原因が、凝固因子の欠乏・異常によるものなのか、抗リン脂質抗体によるものなのか判別する検査法に「クロスミキシング試験」があります。この検査は、患者さんの検体と正常検体をあらかじめ決められた比率で混合し、APTTを測定します。凝固因子の欠乏・異常が原因で延長している場合、正常検体を加えることにより因子が補充されAPTTが短縮します。反対に、抗リン脂質抗体が原因で延長している場合、APTTは短縮しません。

司会者：抗リン脂質抗体症候群の治療法にはどのようなものがありますか。

宮 本：血栓の予防には大きく分けて2つの治療法があります。1つ目は、動脈血栓の予防です。動脈血栓は、主に血小板が固まることによってできます。そのため、血小板が固まるのを防ぐ効果のある「抗血小板剤」を投与します。2つ目は、静脈血栓の予防です。静脈血栓には、血を固まりにくくする薬であるワーファリンを投与します。ただし、ワーファリンの効果は人によって違うので、定期的にPTを測定して服用量を決めなければなりません。また、ワーファリンは胎児に奇形をもたらす可能性があるため、妊娠の可能性のある女性には投与されません。近年、ワーファリンに代わる多くの新薬が開発されています。次に、習慣流産の治療についてです。3回以上流産を連続して繰り返すことを「習慣流産」といいますが、習慣流産の患者さんが抗リン脂質抗体検査で陽性の場合、アスピリンやヘパリン注射によって妊娠の成功率を高めることができます。抗リン脂質抗体症候群は後天性の血栓性素因の代表的な疾患です。近年、病気の仕組みや検査方法が急速に進められていますが、病名がほとんど知られておらず診断されないまま適切な治療を受けていない患者さんがたくさんいる可能性があります。まだ若いのに脳梗塞などの血栓症を指摘された方や、習慣流産の方は、専門家のいる病院で相談や診察を受けられることをおすすめします。